

博物館だより

No. 1



灰釉こま犬 14・5世紀 器高18.0cm

企画展

「陶磁のこま犬」

— 尾張の在銘資料を

中心として —

昭和62年12月19日(土)

～昭和63年1月31日(日)

陶磁のこま犬は、鎌倉時代から大正時代まで、中部地方を中心とした地域にその分布が認められ、なかでも尾張地方は、瀬戸窯をひかえているため、最も濃密に分布する地域といえます。

そして、その成形、装飾、施釉技法等、技術的な変化を紀年銘資料を中心に整理することにより、歴史的な変遷をとらえることが可能となるため、その総合的な調査研究が注目されています。

今回の展示では、一宮市内に伝世する陶磁のこま犬に、愛知県陶磁資料館所蔵の在銘資料を中心とする陶磁のこま犬を加え、歴史的な流れにそって、その変遷をたどるものです。

陶磁のこま犬

こま犬は、「狛犬」「高麗犬」「胡摩犬」とも書きます。本多静雄氏の研究によると、こま犬のルーツは、今から3800年以前の、テルハルマール寺院跡（イラク）から出土した、テラコッタの獅子（ライオン）像までさかのぼることができます。これが東へ移り、インドの初期仏教と結びつき、中国を経て飛鳥時代の日本へもたらされたといわれています。又、こま犬は、木彫、鑄造、石造、テラコッタ、絵画等で表現されており、東・西アジア地域を中心に広く知られていますが、陶磁のこま犬は、どうやら日本以外には認められません。

日本において、最も良く知られている、神社社殿の前に一対で置かれる石造のこま犬は、神社の神域を守る霊獣の役割をもっていますが、陶磁のこま犬は、願い事を託す、あるいは大願成就の御礼の気持ちをこめて、神社に奉納するという性格の強いものが多いようです。

分 布

陶磁のこま犬は、鎌倉時代から大正時代にかけて、瀬戸・美濃を中心とした窯業地において、その大半が焼造されています。

これらの陶磁のこま犬の奉納先については、中部地方を濃密な分布地域としてとらえることができ、尾張地方では、瀬戸市を中心とする近在が圧倒的に多く、次いで尾西、尾北をあげることができますが、知多郡などの南部地方では、ほとんど知られていません。又、尾北、春日井市の東北部等には、美濃窯産のものが混在しています。

三河地方では、東海道沿いにはほとんど知られていませんが、猿投山麓地域から西加茂、東加茂にかけて瀬戸窯産のものが多く認められ、美濃境になるほど全体量の増加とともに美濃窯産が多くなります。

美濃地方では、東濃地域に非常に多く知られている他、美濃市、関市からその北部山間にも多く認められます。又、久々利、水上、瑞浪等に瀬戸窯産のものが少量混在していると言われており興味深い点があります。

この他、飛騨、遠州、熊野等の地方の一部にその分布が知られています。そして、例外的な分布

として、香取神宮（二点、千葉県）、鹿島神宮（三点、茨城県）等をあげることができます。又、楽焼風、瓦焼風のものも少数ですが知られています。

一方、備前、有田、沖縄等の窯業地を中心とした地域においても、少数知られていますが、いずれも大形のものも多く、石造のこま犬に近い性格をもっているようです。

阿・呷と牝・牡

阿と呷は、梵語^{あ うん}の字母^{ほんご}の、初韻（阿）と終韻（呷）であり、万物の最初と最後という意味です。よく、金剛力士像（仁王）やこま犬に、相として表現されており、一方は口を開き（阿）、片一方は口を閉じて（呷）います。

こま犬の原形と考えられているテルハルマール寺院の一対の獅子像は、どちらも口を開いており、牡として表現されています。この獅子像は、中国にはいって、万物を陰と陽の二元で説明する、中国の陰陽五行説によって口を開いたものを陽（阿形）、口を閉じたものを陰（呷形）として表現するようになったと考えられています。しかし、日本には、このように区分される以前の獅子像も伝えられており、法隆寺金堂の壁画等に認められます。そして、平安時代になると、宮中の儀式典禮が、中国唐代の例を模倣した際に、宮中に阿呷二形のこま犬が置かれるようになったようです。これを、獅子と胡摩犬とよんでいたようで、唐代のいずれかの時期より、阿呷の区分がされるようになったと考えて良いでしょう。

牝牡の別については陶磁のこま犬をみてゆくと、鎌倉、室町、桃山時代においては、牝牡の別のものは知られていません。そして、江戸時代になると一部のこま犬に、牝牡の別が表現されるようになっていきます。しかし、あくまでも限られた少数のものであり、こま犬の信仰が庶民の間に親しまれ、身近に感じられだしたからだと考えられます。このように、牝牡の別は、江戸時代に入ってから日本で発生したもので、中国においては認められません。

※1 日本では、天平年間南インドから伝わったといわれる悉曇文字を使用。

※2 音を表記する母体となる字。



成形技法

基本的な成形の手順は、まず胴の部分をつね、足をつけた後、別に拵えておいた頭部を継ぎ合わせ、尾や巻きげ等の細部の仕上げをしています。この中で、大きく分れるのが、胴部の成形法で、手づくね、粘土紐の積み上げ、轆轤作り等があります。

手づくね やや太めの粘土塊を胴として、細い粘土紐を脚として付け合わせした後、目、鼻、耳、尾等、粘土小塊を貼り付けた、素朴な手法で、全期間を通して認められる手法です。

粘土紐の積み上げ 粘土紐の巻きあげなのか、輪積手法なのか不明のものが多いのですが、紐状の粘土塊を、内、外から両手で押し潰しながら円筒状に積み上げて胴部を成形してゆく方法です。瀬戸窯製のこま犬は、この手法が多いようです。

轆轤作り 胴部を轆轤で引き上げて作る方法で、美濃窯製のこま犬に多い傾向があります。全体に薄手の仕上がりとなり、胴部の変化が乏しくなっています。

主な在銘資料



- | | |
|---|--|
| <p>9 灰釉こま犬
(昨形) 上主 木全九右門</p> <p>12 錆釉こま犬 (釘彫銘)
(阿形) 熊野大権現 元禄拾貳卯年 清水□子
(昨形) 尾張丹羽郡 善師野村 清水寺周借</p> <p>13 鉄釉こま犬 (釘彫銘)
(昨形) □□神社 小野村傳六
正徳四^甲年 十一月吉日</p> <p>15 灰釉錆釉掛分こま犬 (釘彫銘)
(阿・昨同文) 外之原村 富田曲右門
寛延二^天八月日 尾笈春日郡</p> <p>16 鉄釉こま犬
(昨形) 奉納 □□村 願主 長谷川定介
八幡宮御神前 宝曆四^甲 戌□□吉旦</p> <p>17 灰釉こま犬 (釘彫呉須流し銘)
(阿形) 丙^丁宝曆七 丑五月吉日 奉上
御神前 瀬戸村 加藤氏</p> <p>18 灰釉こま犬
(昨形) 明和二年セト村 八月七□ カト□白作</p> | <p>21 灰釉こま犬 (釘彫呉須流し銘)
(阿・昨同文) 寛政六年甲寅六月
施主 赤津邑 中嶋定平 セト甚三良作</p> <p>25 長石釉こま犬
(昨形) 奉獻 林全蔵
寛政十三年 西三月吉日 (呉須銘)</p> <p>26 灰釉こま犬 (釘彫呉須流し銘)
(阿形) 奉上 文化八庚未年 外原村 権七
仙吉 金蔵 セト北寫文蔵作
(釘彫のみ・台座裏) 春日井郡せ戸村 北寫文蔵
作之也</p> <p>28 長石釉こま犬 (釘彫銘)
(阿・昨同文) 古陶洞 春位乍</p> <p>29 灰釉こま犬 (台座裏・銘)
(阿・昨同文) 入唐四郎廿七代 (釘彫) 春岱 (花押)
(小判形印) 春岱</p> <p>35 白磁こま犬 (呉須銘)
(阿形) 奉納 明治十七年 五月中頃造焼
(昨形) 愛知縣瀬戸 奥澤氏施主</p> |
|---|--|

歴史と造型

陶磁のこま犬の最も古い例は、萱刈窯跡（瀬戸市）出土の灰釉こま犬陶片であり、元享四年（1324）の銘が認められます。窯跡出土資料は、他に、孫右衛門窯、山口八幡窯、長根窯等が知られています。鎌倉・室町時代の資料については、形態的な特徴から数種類に分類されています。

深川型 深川神社（瀬戸市）の灰釉こま犬を基準とするもので、小さな尖った耳をピンと立て、筋骨しまって逞しく精悍そのものといった姿です。

萱刈型 元享四年や正中等の紀年銘資料を伴う、萱刈窯跡出土資料を基準とするもので、孫右衛門窯跡出土資料が、同種と考えられています。短く小さな耳を前方へ曲げ、小さな目には愛嬌があり、虎か猫に似ているといわれます。棒状の粘土塊に、頭と手足をつけ、足先の指は、篋で切り込んで表現しており、全体に素朴なつくりです。

根津型 利休が、頭を割って香炉に用いたという、根津美術館所蔵の灰釉のこま犬を基準とするもので、眉の奥に小さな鋭い目が光り、その左右に目立たないほどの耳が、前に向かって付けられています。額はせまく、顔や頭は、蛇を連想させる作行で、指先は剣先形です。全体に、太めで短く、ずんぐりとした形状ですが、肩から背にかけて美しい楡目が認められます。横嶺窯跡（瀬戸市）から類似資料が出土しています。

伊勝型 伊勝八幡（名古屋市）所蔵の鉄釉こま犬（応永二五年、墨書銘）を基準とするものです。全体に細身の造りで、細長い前肢を真直ぐ立てて、長めの顔に、大きく尖った耳をピンと立ててつけており、山犬を連想させます。指先は剣先形。瀬戸市赤津の窯跡から類似資料が出土しています。

この時期は、ライオンの原形に比較的近い細目で端正な造りの精作が多く、直立正座の姿勢をし、厳粛な威圧感すらただよわせています。

桃山時代以降になると、全体に太めの体軀で逞ような姿勢となり、その表現は極めて豊かになります。資料数は、江戸時代に入るとともに増加しており、特に後期を中心に急激な増加が認められます。そして、これらの形態、表情には、「喜」「怒」「哀」「楽」が巧みに表現されており、人生の縮図を思わせるほど千差万別で、どの一体をとっても同じ表情はありません。一方、奉納者や作者、年号等を記した銘資料も多く知られ、これらの

資料を核とした、造型技術、釉法の変遷等の調査研究が進められています。

釉薬と施釉法

紀年銘資料を中心に、年代別の釉薬分布をまとめたものが下表です。

釉薬分布概要

世紀 釉薬	15	16	17	18	19	計
灰釉系	18	3	12	25	53	111
鉄釉系	12	12	19	33	81	157
掛け分け	5		3	8	13	29
その他		2	5	17	69	93
計	35	17	39	83	216	390

※無銘、紀年銘資料全体を含む

鎌倉・室町時代のものは、35点の存在が知られていますが、灰釉または鉄釉及び、両者の掛け分けとなっています。この表には含めていませんが、さらに瀬戸の窯跡出土資料として、灰釉21点、鉄釉6点があります。

桃山時代以降は、鉄釉が主流となり、灰釉を施した例がやや少なくなる傾向があります。その反面時代が降るとともに、黄瀬戸釉、長石釉、緑釉、白釉、鉛釉、錆釉等が加わり、華やかさを増しています。又、目や歯だけ無釉にしたり、長石釉、灰釉、鉄釉、山呉須等を点描したものもあり、こうした細かい変化が、こま犬の表情を益々豊かなものにしていきます。この他、釉下に山呉須や鬼板により彩色したり、紀年銘を施した例、さらに、灰釉と鉄釉、緑釉と灰釉、長石釉と黒釉等、複数の釉薬を、上下掛け分けたり、一部流し掛ける等、釉薬を同時に使用する例が増加しています。

このように、初期のこま犬が一様に厳しい神の世界を連想させるのに対し、桃山時代以降は、庶民の心をそのまま造型化しているといえます。

主な参考文献 『こま犬』日本陶磁協会 昭和39年
『陶磁のこま犬』本多静雄 求龍堂 昭和51年

謝 辞

本企画展開催にあたり、次の方々にご協力をいただきました。感謝の意を表する次第です。

愛知県陶磁資料館、鬼頭保司、仲野泰裕、檜崎彰一、藤田昌宏、本多静雄、森与司夫、鷺津正敏、山王社、三明神社、中島宮、白山社及び各社氏子総代
(敬称略)

利 用 案 内

開館時間

午前9:30～午後5:00
(入館は午後4:30まで)

常設観覧料

区分	個人	20人以上の団体
一般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

(1人1回)

休館日

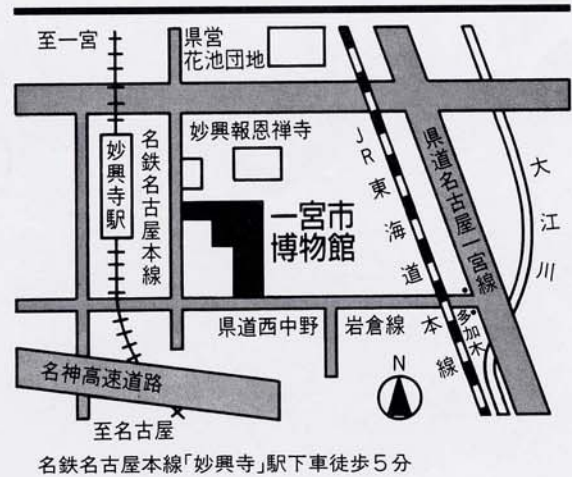
- 毎週月曜日
(ただし、休日にあたる場合は翌日を休館)
- 休日の翌日
(ただし、日曜日又は休日の場合は開館)
- 年末・年始
(12月28日→1月4日)

一宮市博物館開館

一宮市博物館は、11月12日(木)、国・県・市議会及び基本構想等作成委員会の先生方をはじめ約500名の来賓のご参集を得て開館記念式典を挙行、翌13日(金)から一般公開されました。



常設展示とともに開館記念特別展として「一宮の名宝(Ⅰ)一真清田神社と妙興寺一」が12月6日(日)まで開かれました。会期中8千人を越える人々で賑わい、22年ぶりに地元で公開された重要文化財の仏涅槃図(妙興寺蔵)や舞楽面(真清田神社蔵)など好評を博しました。



名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車徒歩5分

催し物のご案内

◎講演会

と き: 昭和63年1月10日(日) 午後1時30分から
と ころ: 講座室
テーマ: 「陶磁のこま犬
一尾張の在銘資料を中心として」

講 師: 愛知県陶磁資料館
学芸員 仲野 泰裕 氏

◎映画会

と き: 昭和63年1月23日(土)
午前11時、午後1時、3時の3回
と ころ: 講座室
上映映画: 「人間国宝・荒川 豊蔵」
「市政ニュース」

◎次回企画展

「パレススタイルの美」
昭和63年3月5日(土)～4月3日(日)

一宮市博物館だより 第1号

昭和62年12月18日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

Tel 0586-46-3215